

## 「少年」節記

——〈知覚〉と〈想起〉——

「少年」は大正十三年四月号の「中央公論」に「少年」と題して、前半の三章「一 クリスマス」「二 道の上の秘密」「三 死」が、五月号の同誌に「少年続編」と題して後半の三章「一 海」「二 幻燈」「三 お母さん」が発表された。のち第七短篇集『黄雀風』（新潮社、大正十三年七月）収録に際し、後半の各章を「四」「五」「六」と改め、多少の字句の改訂の後、「少年」の題名のもとに一編の作品としてまとめられた。

「少年」は、——堀川保吉という芥川龍之介らしき人物が主人公ないし語り手として登場してくる作品を〈保吉物〉と呼ぶなら、〈保吉物〉の一つである。しかし、作者の体験あるいは囑目の風景をひたすらありのままに描こうとするのを〈私小説〉と呼ぶなら、かならずしも〈保吉物〉がそうでないように〈私小説〉ではない。もし今これをさしあたりいえば、むしろ体験あるいは囑目の風景の意味するもの、それが体験あるいは囑目の風景となる所以を描こうとしたもの、といっておこう。が、それにしてもどのようにして——。（以下、順をおって評釈してゆこう。）

## 佐々木 雅 發

### 一、クリスマス

大正十二年のクリスマスの午後、堀川保吉は須田町から新橋行の乗合自動車に乗った。〈彼の席だけはあつたものの、自動車の中は不変身動きさへ出来ぬ満員である。のみならず震災後の東京の道路は自動車を躍らすことも一通りではない〉。保吉は本も読めず、が、隣りの席ではフランス人の宣教師が、まるで〈奇蹟を行つてゐる〉ように〈小さい横文字の本を読みつづけてゐる〉。自動車が大伝馬町に着いた時、〈十二〉の、〈褪紅色の洋服に空色の帽子を阿弥陀にかぶつた、妙に生意氣らしい少女〉が乗ってくる。宣教師は彼女に席をゆずつてやるが、やがて〈膝の上に毛糸の玉を転がしたなり、さも一かど編めるやうに二本の編み棒を動かしてゐる〉少女に、〈「けふは何日だか御存知ですか？」〉と話しかける。〈巧みにクリスト教の伝道へ移るに違ひない〉その問いに、思わず〈顔をしかめ〉た保吉は、しかし、少女の答えを聞いて、これまた思わず〈微笑〉する。〈「けふはあたしのお誕

生日」。

「少女はもう大真面目に編み棒の先へ目をやつてゐた。しかしその顔はどう云ふものか、前に思つたほど生意気ではない。いや寧ろ可愛い中にも智慧の光りの遍照した、幼いマリアにも劣らぬ顔である」。宣教師は「丁度人の良いお伽噺の中の大男が何か」のように哄笑し、少女の「世界中のお祝いするお誕生日」を祝福する。のみか「宣教師の眼はバンス・ネエの奥に笑ひ涙をかがやかせてゐる」。保吉は「その幸福に満ちた鼠色の眼の中にあらゆるクリスマスの美しさを感じた」。「あなたはきつと賢い奥さんに——優しいお母さんにおなりになるでせう。ではお嬢さん、さやうなら」という言葉を残して、宣教師は尾張町の辻で乗合自動車を下りてゆく。

この小話のポイントは言うまでもなく、少女がなんのためらいもなく、「クリスマス」を「あたしのお誕生日」と言い放つたところにある。少女の無智？ いや、そう言うより、少女のいわば自分だけの「私的な認識」が、大人たちの常識、とは「公的な認識」をこえて、潑刺として主張されていたこと、ばかりか、その言葉の真の意味で、まさに的確に主張されていたこと（「けふは何の日」「あたしのお誕生日」）、そのことに保吉が深い感銘を受けたところにある。

「数時間の後、保吉はやはり尾張町の或バラックのカフェの隅にこの小事件を思ひ出した」。あの宣教師は？ あの少女は？ 「保吉も亦二十年前には娑婆苦を知らぬ少女のやうに、或は罪のない問答に娑婆苦を忘却した宣教師のやうに小さな幸福を所有してゐた。大徳院の縁日に葡萄餅を買つたのもその頃である。二州

様の大広間に活動写真を見たのもその頃である」。

「『本所深川はまだ灰の山ですな。』」

「へええ、さうですかねえ。時に吉原はどうしたんでせう？」

「吉原はどうしましたか、——浅草にはこの頃お姫様の姪売が出る」と云ふことすな。」

隣りのテエブルには商人が二人、かう云ふ会話をつづけてゐる。」

保吉の内にも外にも、「娑婆苦」は猛烈に吹き荒れている。へが、そんなことはどうでも好い。へけふはお目出たいクリスマス、「世界中のお祝いするお誕生日」。保吉は食後の紅茶の前に煙草をくゆらせながら、「大川の向うに人となつた二十年前の幸福を夢みづけ」。言うまでもなく、あの自分だけの「私的な認識」の中にいた無垢で至福の時を——。

以下、「この数篇の小品は一本の巻煙草の煙となる間に、統統と保吉の心をかすめた追憶の二三を記したものである」と作品は続く。

## 二 道の上の秘密

第二章は、「保吉の四歳の時である。彼は鶴と云ふ女中と一しよに大溝の往来へ通りかかつた。黒くろと湛へた大溝の向うは後に両国の停車場になつた、名高い御竹倉の竹藪である。本所七不思議の一つに当る狸の莫迦囃子と云ふものはこの藪の中から聞えるらしい。少くとも保吉は誰に聞いたのか、狸の莫迦囃子の聞えるのは勿論、おいてき堀や片葉の蔑も御竹倉にあるものと確信してゐた」と始まる。どうやら、幼い時の「小さい幸福」への追憶の

夢は始まっているらしい。

すると「つうや、(傍点芥川)は、土埃の道の上に長々と走る二条の線を指して、(坊ちゃん、これを御存知ですか?)」とたずねる。

「何でせう? 坊ちゃん、考へて御覧なさい。」

これはつうやの常套手段である。彼女は何を尋ねても、素直に教へたと云ふことはない。必ず一度は厳格に「考へて御覧なさい」を繰り返すのである。」

保吉は爾來三十年間、いろいろの問題を考へて見た。しかし何もわからないことはあの賢いつうやと一しよに大溝(おほいど)の往來を歩いた時と少しも變つてはゐない——。

保吉は、(永遠そのもののやうに通じてゐる)二条の線を見ながら、(幻燈の中に映る蒙古の大沙漠)を思い浮かべたりする。(二すぢの線はその大沙漠にもやはり細はそとつづいてゐた)——。

やがて保吉をしてあれこれと考へ倦ませた末、つうやは「Daisyの巫女」のごとく、(おごそかに道の上の秘密を説明した)。(これは車の輪の跡です)。」

「これは車の輪の跡です! 保吉は呆氣にとられたまま、土埃の中に断続した二すぢの線を見まもつた。同時に大沙漠の空想などは蜃気楼のやうに消滅した。今は唯泥だらけの荷車が一台、寂しい彼の心の中におのづから車輪をまはしてゐる。……」

保吉は未だにこの時受けた、大きい教訓を服膺してゐる。三十年来考へて見ても、何一つ碌にわからないのは寧ろ一生の幸福かも知れない。」

この小話はここで終わる。しかし幼時の「小さな幸福」への遡源の旅は、早くも暗礁に乗り上げていたといわざるをえない。保吉の浸つていたいわけば原生的とも秘私的ともいうべき豊潤な経験の世界は、(少しでも保吉の教育に力を添へたいと思)うつうやの(大人の知恵)によつて、空しく色褪せてしまふ。つまりそうして、過去の(小さな幸福)は、所詮その幻滅と喪失の苦い思いにおいて想起されるしかなかったといえよう。

「何一つ碌にわからないのは寧ろ一生の幸福かも知れない。が、もとより人にそんなことは許されない。いわば子供の(私的な認識)は、その都度つねに、大人の(公的な認識)によつて覆され、塗りかえられて来たのだ。」

保吉も(爾來三十年間、いろいろの問題を考へて見た)。が、しかし、(何もわからないことはあの賢いつうやと一しよに大溝の往來を歩いた時と少しも變つてはゐない)。とはつまり、人はそうして終始、(認識)の試行錯誤の道の上を彷徨しつづけるしかないのか——。

### 三 死

これもその頃の話である。晩酌の膳に向かつた父は、(「とうとうお目出度なつたな、ほら、あの横丁の二弦琴の師匠も」)と話している。傍らにいて父から刺身をもらつた保吉は、(感謝の意を表する)ため、(「さつきはよそのお師匠さん、今度は僕がお目出度なつた!」)と言う。すると父は勿論、母や伯母も(一時にどつと笑ひ出した)。

(笑ひ声の静まつた後、父はまだ微笑を浮べたまま、大きい手に

保吉の頸すじをたたいた。「お目出度なると云ふことはね、死んでしまふと云ふことだよ。」

あらゆる答は鋤のやうに間の根を断つてしまうものではない。寧ろ古い問の代りに新しい問いを芽ぐませる木鉢の役にしか立たぬものである。三十年前の保吉も三十年後の保吉のやうに、やつと答を得たと思ふと、今度はその又答の中に新しい問を発見した。

「死んでしまふて、どうすること？」

「死んでしまふと云ふことはね、ほら、お前は蟻を殺すだらう。……」

父は氣の毒にも丹念に死と云ふものを説明し出した。

しかし、父の説明は保吉に満足を与えない。へ成程彼に殺された蟻の走らないことは確かである。けれどもあれは死んだのではない。唯彼に殺されたのである。

「殺されたのは殺されただけぢやないの？」

「殺されたのも死んだのも同じことさ。」

「だつて殺されたのは殺されたつて云ふもの。」

「云つても何でも同じことなんだよ。」

「違ふ。違ふ。殺されたのと死んだのとは同じぢやない。」

「莫迦、何と云ふわからないやつだ。」

父に叱られた保吉の泣き出してしまつたのは勿論である。

そしてへその後数箇月の間、保吉はへ丁度ひとかどの哲学者のやうに死と云ふ問題を考へつづけた。へ死は不可解そのものである。へ殺された蟻は死んだ蟻ではない。それにも関わらず死んだ蟻である。この位秘密の魅力に富んだ、掴へ所のない問題はな——い——い——。

つうやとへ道の上の秘密を問うていた保吉は、ここで、父とへ死を問う保吉に変わっている。へやつと答を得たと思ふと、今度はその又答の中に新しい問を発見しな——ながら？——しかしへ死とはまた、なんと究極的な問いであることか。

ところで、いささか唐突な論及となるが、国木田独歩は生涯にわたつてへ死に強くこだわっていた。たとえば「死」(「国民之友」明治三十一年六月。へ自分(大野)が親友の富岡竹次郎を訪れると、富岡はその直前に短刀で自殺していた。

へ死の影は此慘澹たる一室を覆ふてゐる。しかし自分と富岡の死との間には天地の隔離があつて却て自分の脳底暗黒の裡には富岡が分明に微笑してゐる、渠の平常の行為容貌性癖一口にいへば生命ある活動する平常の渠が極めて分明である。目を開けると富岡の血にまみれた死体が横たはつてゐる、目を閉ざると富岡は生きて現はれて来る、乃ち此時は自分の目前に在る「死」の事象よりも自分の脳底に深く刻まれてゐる「死体」の幻影の方が自分の感情に取つては更に力ある事実であつた。

つまり眼を開ければ、見えるのは富岡のへ死体であり、眼を閉じれば、生きている富岡が想起されるばかりで、目前にあるはずの富岡のへ死そのものに、へ自分へはついにまみえることは出来ないのである。

独歩はこのことを「岡本の手帳」(「中央公論」明治三十九年六月)でも繰り返す。

へ吾等は死を見る能はず、ただ死体を見るのみ。生を見ることなし、ただ生体を見るのみ。故に生死の不思議に打たれずして生体の死体となりしを見るのみ。否、生体を見しかして死体を見るのみ。

凡て人が事実を見ずして幻影を見るの尤も甚だしき例は死の場合なり。」

そして死を旦夕に控えた『病牀録』（新潮社、明治四十一年七月）に、  
「死は遂に問題なり。正確なる事実として痛切に吾人に触るごと、恐らく無からん。少くとも余に於ては、この当然嚴肅なるべき事実を單なる思索上の問題としての外に取扱ふ事を得ざるなり。」

「一念死の問題に到達すること、常に吾が死の甚だ遠からざるを知る」（傍点独歩）。しかり「知るなり、唯知るなり」。しかも「思ふに、知る事は單に知る事なり。触る、事にあらず」。

「余は何うしても死ぬやうな気がしない」。

問題としての死は、或は神秘に、或は深遠に、或は嚴肅に、或は態とシヤレテ滑稽に論ずることを得べし。事実としての死は遂に死ぬまで吾人の胸に痛切真摯に触れ得ざるもの、如く思はる。

一度死んで見なければ、眞の死を事実として取扱ふを得ず。

要するに、古来幾多の死生観は單に問題に過ぎざる可し。人を後にし、事を先にし、総ゆる死に関する智識を綜合して、死とは何ぞやと論じたる閑事業に過ぎざる可し。」

独歩はまさしく究極のことを言っている。すべて人は死ぬ。無論そのことを知らぬものはいない。しかし知っているとどれほど「言葉」を費やしても、現にそうして生きている以上、死んでいるわけではない。一度死んで見なければ「死」に触れることに、<sup>(3)</sup>「死」を経験することにもならない。

独歩を深く敬愛した芥川が、これ等の文章を読んでいなかったはずはない。しかしそれはともかく、保吉もまた「此事に思ひ悩やむで今は益々自分を苦めてゐる」（「死」）ではないか。

さて、話は続く。

「保吉は死を考へる度に、或日回向院の境内に見かけた二匹の犬を思ひ出した。あの犬は入り日の光の中に反対の方角へ顔を向けたまま、一匹のやうにちつとしてゐた。のみならず妙に嚴肅だつた。死と云ふものもあの二匹の犬と何か似た所を持つてゐるのかも知れない。……」

さらに、へすると或火ともし頃である。保吉は役所から帰つた父と、薄暗い風呂にはひつてゐた。そこへ女中が父を呼びに来た。父は身体を拭き、硝子障子をあけた。その時、湯気の中に見た父の後ろ姿が、へなぜか四歳の保吉の心にしみじみと寂しさを感じさせた。「お父さん」と保吉は思わずそう呼びかけようとした。しかし二度目の硝子戸の音は靜かに父の姿を隠してしまつた。

「保吉はひつそりした据ゑ風呂の中に茫然と大きい目を開いた。同時に従来不可解だつた死と云ふものを發見した。——死とはつまり父の姿の永久に消えてしまふことである！」

言うまでもなく、ここで描かれてゐるのは体験や囁目の風景そのものではない。（前に述べたように）その体験や囁目の風景の意味するもの、あるいはそれが体験や囁目の風景となる所以のもの、つまりこの場合、生の途次にある「性」とか「別離」、いやそれよりもなおその背後に、つねに遍在する「死」の見えない影である。

しかし無論、これで「死」が言い当てられたわけのものではない。常に目に見えない影として遍在する「死」とすれば、「死」はいまこれと具体的には決して語りえない。だからこの小話も自

ずから、〈死〉を語るべき試みのひとつにすぎないといえよう。(5)

#### 四 海

〈保吉の海を知つたのは五歳か六歳の頃である〉。初めて見た大森の海は、〈日の光りに煙〉り、〈何か妙にもの悲しい神秘〉を感じさせた。しかし海の〈不可思議〉はそればかりではない。

〈渚へ下りた時〉、彼は〈あらゆる海の幸を享樂した〉。〈茶屋の手すりに眺めてゐた海は何処か見知らぬ顔のやうに、珍らしいと同時に不気味だつた。——しかし干潟に立つて見る海は大きい玩具箱と同じことである。〉〈さゞ波〉、〈蟹や寄生児〉、〈海草〉、〈法螺貝〉、〈浅蜆〉——。〈保吉の享樂は壮だつた〉。しかしそういう享樂の中にも、〈多少の寂しさ〉がないわけではなかつた。

〈彼は従来海の色を青いものと信じてゐた。両国の「太平」に売つてゐる月耕や年方の錦絵をはじめ、当時流行の石版画の海はいづれも同じやうにまつ青だつた。殊に緑日の「からくり」の見せる黄海の海戦の光景などは黄海と云ふのにも関わらず、毒毒しいほど青い浪に白い浪がしらを躍らせてゐた。しかし目前の海の色は——成程目前の海の色も沖だけは青あをと煙つてゐる。が、渚に近い海は少しも青い色を帯びてゐない。正にぬかるみのたまり水と選ぶ所のない泥色をしてゐる。いや、ぬかるみのたまり水よりも一層鮮やかな代赭色をしてゐる。彼はこの代赭色の海に予期を裏切られた寂しさを感じた。しかし又同時に勇敢にも残酷な現実を承認した。海を青いと考へるのは沖だけ見た大人の誤りである。〉

〈海は実は代赭色をしてゐる。バケツの錆に似た代赭色をしてゐる。——それは海の色に関する保吉の、まさに原生的、秘私

の経験といえる。無論それまで、保吉に海の色に関する〈知識〉がなかつたわけではない。いわば〈青い〉という人のいう〈言葉〉の中で、保吉は海の色を考えていたのだ。

しかし、いま保吉は海を目前に見る（いわゆる〈知覚〉する）。そしてそう直接に〈知覚〉した以上、その経験になんらの虚妄も錯覚もない。〈代赭色の海〉。その鮮烈な印象——。

ところで記述は次のように続く。

〈三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのまま当嵌る態度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したことはない。且又この代赭色の海を青い海に変へようとするのは所詮徒勞に畢るだけである。それよりも代赭色の海の渚に美しい貝を発見しよう。海もそのうちには沖のやうに一面に青あをとなるかも知れない。が、将来に悔れるよりも寧ろ現在に安住しよう。——保吉は予言者的精神に富んだ二三の友人を尊敬しながら、しかもなほ心の一番底には不相変ひとりかう思つてゐる。〉

無論これは、〈幻滅〉ということ語っているのではない。〈知覚〉とその経験の事実性、そしてその根源性ということが語られている。もとより〈三十年前の保吉の態度〉も、〈三十年後の保吉〉の態度も、なんの変わりもない。人はそうして、なによりも〈知覚〉とその経験において、刻々のいま〈現在〉を、まず直接に、そして端的に生きるのである。

さて話は次のような後日談に続く。

〈大森の海から帰つた後、母は何処かへ行つた帰りに「日本昔噺」の中にある「浦島太郎」を買つて来てくれた。かう云ふお伽噺を読んで貰ふことの楽しみだつたのは勿論である。が、彼はそ

の外にももう一つの楽しみを持ち合せてゐた。それはあり合せの水絵具に——挿絵を彩ることだつた。彼はこの「浦島太郎」にも早速彩色を加へることにした。「浦島太郎」は一冊の中に十ばかりの挿絵を含んでゐる。彼はまづ浦島太郎の龍宮を去るの図を彩りはじめた。龍宮は緑の屋根瓦に赤い柱のある宮殿である。乙姫は——彼はちよつと考へた後、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を塗ることにした。浦島太郎は考へずとも好い。漁夫の着物は濃い藍色、腰蓑は薄い黄色である。唯細い釣竿にずつと黄色をなするのは存外彼にはむづかしかつた。蓑亀も毛だけを緑に塗るのは中中なまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。

バケツの錆に似た代赭色である。——保吉はかう云ふ色彩の調和に芸術家らしい満足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顔へ薄赤い色を加へたのは頗る生動の趣でも伝たもののやうに信じてゐた。保吉は、実際に見たことのない「想像」の世界のものを、まさしく大人からの受け売り（大仰にいえば、蓄積され定着されてきた日本の文化伝承、習慣）に則つて彩色する。へ龍宮へ、へ乙姫へ、へ浦島太郎へ、へ蓑亀——。しかし保吉は最後に、海は、自分が実際に見た代赭色で仕上げるのである。

へ保吉は匆匆母のところへ彼の作品を見せに行へく。へ彼は当然母の口から褒め言葉の出るのを予期してゐた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかつた。

「海の色は可笑しいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの？」

「だつて海はかう云ふ色なんだから。」

「代赭色の海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色ぢやないの？」

「大森の海だつてまつ青だあね。」

「ううん、丁度こんな色をしてゐた。」

母は彼の強情さ加減に驚嘆を交へた微笑を洩らした。が、どんなに説明しても、——いや、癪癪を起して彼の「浦島太郎」を引き裂いた後さへ、この疑ふ余地のない代赭色の海だけは信じなかつた。

こうして、あの子供の原生的、秘私的な「認識」は、大人たちのいわば歴史的、総合的な「認識」による試練、あるいは蹂躪にさらされる。

さて、話は次のように閉じられる。

へ……「海」の話はこれだけである。尤も今日の保吉は話の体裁を整へる為、もつと小説の結末らしい結末をつけることも困難ではない。たとえば話を終る前に、かう云ふ数行をつけ加へるのである。——「保吉は母との問答の中にもう一つの重大な発見をした。それは誰も代赭色の海には、——人生に横たはる代赭色の海にも目をつぶり易いと云ふことである。」

けれどもこれは事実ではない。のみならず満潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてゐる。すると現実とは代赭色の海か、それとも亦青い海か？ 所詮は我我のリアリズムも甚だ当にならぬと云ふ外はない。かたがた保吉は前のやうな無技巧に話を終ることにした。が、話の体裁は？——芸術は諸君の云ふやうに何よりもまつ内容である。形容などはどうでも差支へない。」

重要なのは後半である。へ代赭色の海へ、とは子供の「私的な認識」が必ずしも真実なのでもない。事実、へ青い色の海へもある。へすると現実とは代赭色の海か、それとも亦青い海か？。いや

海の色それ自体などというものはない。その時その場で色彩を変える海があるだけである。

なるほど、いずれは「青い色の海」とは大人の「公的な認識」に軍配はあがるだろう。しかしそれが絶対であるという保証はどこにもない。とすれば「所詮は我々のリアリズム」、つまり対象の「実在」を言い当てようとする「認識」の所業は、へ甚だ当にならぬと云ふ外はない。

## 五 幻燈

七歳の保吉が父に幻燈を買ってもらった時のことである。玩具屋の主人は、「このランプへかう火をつけて頂きます」と言つて、そつとそのランプを幻燈器の中へ移した。「ランプを入れて頂きますと、あちらへああ月が出ますから、——」(傍点芥川)。

幻燈は向こうの白壁に、「丁度差渡し三尺ばかりの光りの円」を描いた。「成程月に似てゐる」。続けて主人が「こちらへかう画をさすのですな」というと、「光りの円はいつの間にかほんやりと何か映してゐる」。夢のやうに何処から漂つて来た薄明りの中の石鹼玉である。「あのほんやりしてゐるのはレンズのピン<sup>しぼだま</sup>トを合せさへすれば——この前にあるレンズですな。——直に御覧の通りはつきりなります」。すると「石鹼玉は見る見る一枚の風景画に変わった」。もつとも「日本の風景画ではない」。水路の両側に家々の聳えた何処か西洋の風景画である。

「時刻はもう日の暮に近い頃であらう。三日月は右手の家の空にかすかに光りを放つてゐる。その三日月も、家々も、家々の窓の薔薇の花も、ひっそりと湛へた水の上へ鮮かに影を落としてゐる。

人影は勿論、見渡したところ鷗一羽浮んでゐない。水は唯突当りの橋の下へまつ直に一すぢつづいてゐる。

「イタリヤのベニス風景でございます。」

「三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教へたのはダンヌンチオの小説である。けれども当時の保吉はこの家々だの水路だのに唯たよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は大きい丹塗りの観音堂の前に無数の鳩の飛ぶ浅草である。或は又高い時計台の下に鉄道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だのは何と云ふ寂しさに満ちてゐるのであらう。鉄道馬車や鳩は見えずとも好い。せめて向うの橋の上に一列の汽車でも通つてゐたら——」。

「丁度かう思つた途端である。大きいリボンをした少女が一人、右手に並んだ窓の一つから突然小さい顔を出した。どの窓かははつきり覚えてゐない。しかし大体三日月の下の窓だつたことだけは確かである。少女は顔を出したかと思ふと、更にその顔をこちらへ向けた。それから——遠目にも愛くるしい顔に疑ふ余地のない類笑みを浮べた? が、それは掛け価のない一二秒の間の出来ごとである。思はず「おや」と目を見はつた時には、少女はもういつの間にか窓の中へ姿を隠したのであらう。窓はどの窓も同じやうに人氣のない窓かけを垂らしてゐる。……」

「さあ、もう映しかたはわかつたらう?」。父の言葉に保吉は茫然と我に返つた。「父は葉巻を啣へたまふ、退屈さうに後ろに佇んでゐる」。保吉は急にこの幻燈を一刻も早く彼の部屋へ持つて帰りたいと思ひ出した。——

「保吉はその晩父と一しよに蠟を引いた布の上へ、もう一度ヴェ



ネチアの風景を映した。中空の三日月、両側の家、家の窓の薔薇の花を映した一すぢの水路の水の光り、——それは皆前に見た通りである。が、あの愛くるしい少女だけではどうしたのか今度は顔を出さない。窓と云ふ窓はいつまで待つても、だらりと下つた窓かけの後に家秘の秘密を封じてゐる。保吉はどうとう待ち遠しさに堪へかね、ランプの具合などを気にしてゐた父に歎願するやうに話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？ 何処かに女の子があるのかい？」

父は保吉の間の意味さへ、はつきりわからない様子である。

「ううん、ゐはしないけれども、顔だけ窓から出したぢやないの？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしないさ。」

「だつて顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を云つてゐる？」

父は何と思つたか保吉の顔へ手のひらをやつた。それから急に保吉にもつけ景氣とわかる大声を出した。

「さあ、今度は何を映さう？」

保吉はそれを耳にもかけず、ヴェネチアの風景を眺めつづけた。窓は薄明るい水路の水に静かな窓かけを映してゐる。しかしいつかは何処かの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない——。

《彼はかう考へると、名状の出来ぬ懐かしさを感じた。同時に従

来知らなかつた或る嬉しい悲しさを感じた。あの画の幻燈の中にちらりと顔を出した少女は實際何か超自然の靈が彼の目に姿を現はしたのであらうか？ 或は又少年に起り易い幻覺の一種に過ぎなかつたのであらうか？ それは勿論彼自身にも解決出来ないのに違ひない。が、兎に角保吉は三十年後の今日さへ、しみじみ塵勞に疲れた時にはこの永久に帰つて来ないヴェネチアの少女を思ひ出してゐる。丁度何年も顔をみない初恋の女人でも思ひ出すやうに。》

さて、この小話のポイントは、はたして少女は窓から顔を出したのか、つまり少女は本当に存在したのか？ ということである。

保吉には、たとえ一二秒の間の出来ごと」とはいへ、少女の顔が見えたという。とすれば、たしかに少女はいたのである。（前に述べたように）（<sup>6</sup>）知覺の経験の事実性、言い換れば無謬性においてそういえる。

しかも保吉に二度と見ることが出来ない（現にスクリーンに映っていない）以上、少女はいなかつたといわざるをえない。

だが保吉は、（顔を出したのが見えたんだもの）と主張してやまない。とはつまり、保吉はそのことを覚えてゐる（記憶）のであり、（思ひ出してゐる）（想起）のである。

要するに、目には見えないが、目を瞑れば見えるのである。ということは、頭の中で思つてゐる（思考）のであり、さらにいえば、言葉と文脈において（想起）してゐる、あるいは言葉と文脈においてしか（想起）できないのだ。

まさしく思い出の中で、少女は繰り返して生き生きと存在する。しかしそれは終始言語命題的に、とはいわば言葉のアーヤの中でそ

の都度想像されているというしかない。もともと、過去それ自体などというものはないからである。物それ自体などというものがないように――。

## 六 お母さん

保吉が八歳か九歳の秋である。回向院の境内では戦争ごっこが始まっていた。陸軍大將は、鑓屋の子の川島である。川島は四人の部下を任命(?)した。保吉は「地雷火」である。「地雷火は悪い役ではない。唯工兵にさへ出合はなければ、大將も倅に出来る役である」。保吉は「得意」になって、「誰よりも先へ呐喊し、やがて敵の大將に追ひすが。へと思ふと石に蹶いたのか、俯向けに其処へ転ん」で、へ顔は一面に鼻血にまみれ、保吉は「大声に泣きはじめた」。敵味方の少年はこの騒ぎに折角の激戦も中止したまま、保吉のまはりへ集まつた。「やあ、負傷した」と云ふものもある。「仰向けにおなりよ」と云ふものもある。「おいらのせむぢやない」と云ふものもある。すると突然川島が嘲笑の声を挙げた。「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」。

みなはたちまち笑い出した。しかし保吉は泣いたにもせよ、「お母さん」などと云つた覚えはない。へそれを云つたやうに誣ひるのはいつもの川島の意地悪である。——かう思つた彼は悲しさにも増した口惜しさに「ばい」になつたまま、更に又震へ泣きに泣きはじめた。少年達は「口口に川島の言葉を真似しながら、ちりちりに何処かへ駈け出して行つた」――。

「保吉は爾來この「お母さん」を全然川島の発明した謠とばかり

に信じてゐた。処が丁度三年以前、上海へ上陸すると同時に、東京から持ち越したインフルエンザの為に或病院へはひることになつた。熱は病院へはひつた後も容易に彼を離れなかつた。彼は白い寝台の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んでくる黄沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると或蒸暑い午後、小説を読んでゐた看護婦は突然椅子を離れると、寝台の側へ歩み寄りながら、不思議さうに彼の顔を覗きこんだ。

「あら、お目覚になつていらつしやるんですか?」

「どうして?」

「だつて今お母さんて仰有つたぢやありませんか?」

保吉はこの言葉を聞くが早い、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意地の悪い謠をついたのではなかつたかも知れない。ところどころでまず、泣きながら無意識に母を呼ぶ少年の声に、作者芥川龍之介の「宿命の根源」を読む三好行雄氏の論に言及しなければならぬ。実にこの論は、現在の「少年」論に決定的な影響を与えているといえるからである。

生後まもなく母を狂気に奪われた少年の、「識閣下の即自の闇」にはぐくまれた「自分にだけ必要な母の幻像」――。

「少年」のモチーフの根は、その識閣下にひそむ母親願望にまで確実に届いている。母が生きていて、しかも、狂気が子を拒むという、この種の不在がいっそう悲劇的なのである。こばまれてあることを知っているから、母親への呼びかけは無意識の行為としてしかあらわれないし、意識は無意識の呼びかける声を聞くことができない。いうまでもなく、かれが呼ぶのは現実の母ではなく、無意識の闇にひそむ仮現の母である。「少年」はこうして、

宿命の強い無意識の秘儀をえがくことで、龍之介のきわどい肉声をひびかせることになった。」

そして三好氏はここに、その出発以来秘匿しつつけて来た母の姿を、やがて来る「肉体の死を代償」として奪還しようとする芥川の、密かな決意を読むのである。「芥川龍之介はようやく、みずからの宿命をたじろぐことなく見送ることができた」。

おそろくここに、「お母さん」というこの章が「少年」最終章に置かれた所以もある。少年の日への「三十年」の月日の遡行。そのはてに芥川に、自らをとらえてはなさぬ宿命からの、「死を賭け」た解放への願いがたしかなものとして兆していたのだ――。

しかしそれにしても、「少年」が芥川の自伝的要素の濃い作品として読まれるのは、けだし当然といえる。いや、作品をつねに作者の実生活の影として読むことを私小説的な読書偏向として退け、作品独自の世界、その自律性をこそ追求すべきであるという議論は、むしろ抽象的といえる。へ完全に自己を告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るはずのものではない（「告白」「俳儒の言葉」と芥川もいっている）。

だが無論作品を一体として読むかぎり、三章や四章に出てくる母を、いわば母一般として読みながら（もとよりそれを養母芥川儼と読んでもよい）、六章に来て、「お母さん」と呼ばれるべき母を急に、「狂気の母」（つまり実母新原ふく）として読みかえるのは、いささか御都合主義的との謗りを免れまい。

が、それはともかく（そして以下はより本質的な疑問だが）、三好氏のいわゆる「無意識」（「識閥下」という言葉の意味についてで

ある。三好氏自身言っていたように、「意識は無意識の呼びかける声を聞くことができない」。つまり人は自らの「無意識」（「識閥下」とは、ついに無縁でしかないのだ）。

しかも保吉が自ら知らぬうちに「お母さん」と言ったとしても、それが意識上に出現したのは、この場合、川島の「やあ、お母さん」つて泣いてあやがる！」という言葉によるのである。他の少年達のそれに同意する言葉によるのである。

無論、保吉は自らの声を聞かなかったのだから、「お母さん」などと云つた覚えはない」という。しかしその時断然と否定したにもかかわらず、二十数年を隔てて、保吉はふたたび自ら知らずに「お母さん」と言つたという。しかも今回も、保吉はそれを看護婦の言葉で知るのである。

こうして、同じ経験が度重なるを通して、保吉はようやく、自分がその都度、母を呼んだのではないかと疑いはじめる。

もとより、保吉が内に秘めつつけていた事実にまみえる、といったことではない。要は「真実」が、他人の口――言葉や文脈、その繰返しを通して、制作され、あるいは捏造されてゆくことである。

おそろくこの小説の意味はここまでであり、それ以上のことはなにも言われてない。無論保吉はいまもって、自分が「お母さん」といったと確信しているわけではない。むしろ半信半疑。しかもそういう形で「真実」が着々と制作され、あるいは捏造されてゆくことに、深甚なる驚異、というより恐怖を感じているのである。

注(1)

「同時代評」や「研究史」については、篠崎美生子「芥川『少年』の読まれ方——『小品』から『小説』へ——」(『繙』第六号、平成五年十二月)参照。

(2) おそらく初回の「少年」が「三死」を最終章にしているのは偶然ではない。

(3) このことについて、拙稿「窮死」前後——最後の独歩——(『国文学研究』第百二十八集、平成十一年六月)で論及した。

(4) あるいは「二匹の犬」の光景について、雄雄が「一匹のやうになつて子を生む、しかもそのように個体を無化(死)しながら種を存続せしめる(性)の(厳肅)」——ととれないこともない。しかしこれも所詮は、「態とシヤレて滑稽に論じたという域を出ないのはいうまでもない。

(5) すでに早く「大川の水」(「心の花」大正三年四月)において、

「夜と水との中に漂ふ『死』の呼吸」が語られている——。

(6) 「幽霊の正体見たり枯尾花」。しかしたとえ「二秒の間の出来ごと」でも、それを「幽霊」と見たのは動かない現実である。

(7) 「へかりに言語以前の過去経験があるとしてもそれは形を持たない模倣とした不定形な経験である。それは確定され確認された形を持たない未発の経験でしかあるまい。それが確定された形を備えた過去形の経験になるためには言葉に成ることが必要なのである。そして言葉に成り過去形の経験に成ること、それが想起なのである。」

「過去形の経験は想起されることがなければ全くの「無」なのである。その無は忘却の空白として誰にも親しいものである。その空白から想い出そうと様々な言葉を探し、選び、試みる。ああではなかった、こうでもなかった、と何度かしくじった後で遂に一つの文章や物語が想い出される。こうして過去形の言葉が作り上げられること、それが過去形の経験が制作されることなのであり、それが「過去を想い出す」といわれることなのである。」(ある知覚・行動の経験、例えば海水浴の経験は今最中の経験であり、そこには太陽や海や五体の動きはあるが、多く言葉はない。海水浴は作歌ではな

いからである。この海水浴を想起するとは、この知覚・行動経験が今一度繰り返されたという過去形の経験を作ることではない。海水浴をしたという過去形の経験を作ることである。太陽や海や日焼けはそこない。それらは過ぎ去り消え去つていく。(大森莊蔵「時間と自我」青土社、平成四年三月。なお傍点大森氏)。

(8) 「宿命のかたち——芥川龍之介における(母)——」(芥川龍之介論「筑摩書房、昭和五十一年九月)

(9) 駒尺喜美「少年」(芥川龍之介作品研究「八木書店、昭和四十四年五月)に、(芥川を理解するには、「少年」は欠かせぬ重要な作品)とあるが、さらに、芥川のすべての作品のカラクリはこの「少年」に隠されているといつても過言ではない。たとえば「鼻」(「新思潮」大正五年二月)は単に、人間のエゴイズムというものをとらえた作品ではない。むしろ他人の評判「言葉に」喜一憂して生きなければならぬ人間の姿を写している。「龍」(「中央公論」同八年五月)も、「見渡す限り西も東も一面の人の海」、そのほとんどの人が見たというからには、龍は真実見えたという話である。「南京の基督」(「同」同九年七月)の宋金花は、梅毒の症状が潜伏期に入つたのをキリストと交つて平癒したものと思ひ込む。いわば信仰「物語」の至福、つまり想起「言葉の経験が描かれているのだが、しかし梅毒がやがて再発するとき、金花が自らの身体知覚、その真実性や直接性に苦しむのはいうまでもない。「秋山図」(「改造」同十年一月)の煙客翁はたしかに「秋山図」を見た。しかしそれから五十年、彼はそれを繰り返し想起しながら、「秋山図」以上の「秋山図」を自ら制作、いや捏造していったのである。そして「庭」(「中央公論」同十一年六月)の次男は「殆ど幻のやうに昔の庭を見る事が出来た」という。しかし「細かい部分になると、はつきりした事はわからぬ」とい。だから彼は「昔の庭」を「ああではなかった、こうでもなかった、と何度かしくじりながら、自ら制作、捏造、いや創造するしかなかったのである。